

e ラーニングコンテンツ作成の試みとそれらが目指すもの

獣医放射線学

○稲波 修 北大獣医学研究科放射線学教室

獣医療での放射線利用範囲はここ数年大きな動きを示し、獣医療法の改訂が行われ、幾つかの限定条件が付いているものの核獣医学に基づいた診断・治療が可能となった。具体的には SPECT、PET の利用と 1 MeV 以上の放射線発生装置を用いた癌の放射線治療が可能となった。これは獣医療の高度化ということでは画期的なことであるが、一方では学部の非密封放射線同位元素の安全取り扱いや放射線防護に関する教育・実習が極めて重要になった事を意味している。医療では医師教育と同時に放射線技師教育があり、医師の専門支援スタッフとして放射線技師、医学物理士が手厚い体制を整えて診断・治療に当たっている。一方、既に先進的に核獣医学を行っている獣医診療機関ではこのような専門支援スタッフは医療機関と比較してきわめて少ないのが現状である。全国の獣医学系大学に目を向けると、放射線学や画像診断学を冠に持つ研究室はここ数年の間に自助努力でいくつか増えたとはいえ、まだ教育に十分なスタッフが配置されているとは言えないのが現状である。また、問題なのは現時点で非密封放射性同位元素の取り扱いや放射線防護に関する実習も含めた教育体系が全国の担当教員によって統一的に検討され、必要最低限のカリキュラムが共通設定されていないことである。以上のように核医学に関してはある意味で法令が先行しているといえる現状をふまえ、学部教育において統一的な核獣医学の知識の習得する教育体系、すなわちコアカリキュラムの作成を進めることが重要かつ急務であると考えられる。そして、それに基づいて全国の大学でその実施を検証する必要がある。今回の e ラーニングコンテンツはコアカリキュラムに基づいて作成されることが必要であり、コアカリキュラムを各大学で容易にすすめるための基礎的教育資料となることが望まれる。本シンポジウムでは現在進めている e ラーニングコンテンツの作成の進行状況の概略を紹介するとともに、獣医核医学や放射線治療に関する基礎教育が抱える問題点を整理し、今後の目指すべきものを考えてみたい。